

二〇二五年度 大学院Ⅲ期(外国人)入学試験問題 実践女子大学大学院

科目	科	課程	専攻	受験番号	氏名	採点
近代文学	文学研究科	博士前期	国文学専攻			

以下の問一～問三のすべてに答えなさい(解答はすべて解答用紙に記入すること)。

問一 次の(1)～(5)について、それぞれ説明しなさい(字数制限なし)。

- (1)『青鞥』 (2)『文章世界』 (3)家庭小説 (4)自然主義 (5)田村俊子

問二 次に示すのは、明治期に発表された小説の冒頭部分である。作者名・作品名・梗概を記した上で、この作品の文学史における位置づけ、および表現上の特質などについて論述しなさい(字数制限なし)。

石炭をば早や積み果てつ。中等室の卓のほとりはいと静にて、熾熱燈の光の晴れがましきもやくなし、今宵は夜毎にこゝに集ひ来る骨牌仲間も「ホッパ」に宿りて、舟に残りしは余一人のみなれば。五年前の事なりしが、平生の望足りて、洋行の官命を蒙り、このセイゴンの港まで来し頃は、目に見るもの、耳に聞くもの、一つとして新からぬはなく、筆に任せて書き記したる紀行は日ごとに幾千言をかなしけむ、當時の新聞に載せられて、世の人にもてはやされしかど、今日になりてはば、穉き思想、身の程知らぬ放言、さらぬも尋常の動植金石、さては風俗などをさへ珍げにしるしを、心ある人はいかに見けむ。こたびは途に上りしとき、日記ものせむとて買ひし冊子もまだ白紙のままなるは、獨逸にて物學びせし間に、一種の「ニル、アドミラリイ」の氣象をや養ひ得たりけむ、あらず、これには別に故あり。

げに東に還る今の我は、西に航せし昔の我ならず、學問こそ猶心に飽き足らぬどころも多かれ、浮世のうきふしをも知りたり、人の心の頼みがたきは言ふも更なり、われどわが心さへ變り易きをも悟り得たり。きのふの是はけふの非なるわが瞬間の感觸を、筆に寫して誰にか見せむ。とれや日記の成らぬ緣故なる、あらず、これには別に故あり。

嗚呼、プリンヂイシイの港を出でしより、はや二十日あまりを経ぬ。世の常ならば生面の客にさへ交を結びて、旅の憂さを慰めあふが航海の習なるに、微恙にことよせて房の裡にのみ籠りて、同行の人々にも物言ふことの少きは、人知れぬ恨に頭のみ惱ましたればなり。是恨は初め一抹の雲の如く我心を掠めて、瑞西の山色をも見せず、伊太利の古蹟にも心を留めさせず。中ごろは世を厭ひ、身をはかなみて、腸日ごとに九廻すともいふべき慘痛をわれに負はせ、今は心の奥に凝り固まりて、一點の翳とのみなりたれど、文讀むごとに、物見ること、鏡に映る影、聲に應ずる響の如く、眼なき懷舊の情を喚び起して、幾度となく我心を苦む。嗚呼、いかにしてか斯恨を銷せむ。若し外の恨なりせば、詩に詠じ歌によみし後は心地すが／＼しくもなりなむ。これのみは餘りに深く我心に鏤りつけたればさはあらしと思へど、今宵はあたりにも無し、房奴の來て電氣線の鍵を振るには猶程もあるべければ、いで、その概略を文に綴りて見む。

問三 近代文学研究における「雑誌」の資料的価値について論述しなさい(字数制限なし)。